国際交流基金アジアセンター　アジアフェローシップ報告書

ASEAN 地域におけるファウンドビデオとビデオ史の考察、及び映像作家同士のネットワークの構築

柴田祐輔

活動スケジュール (日程 , 場所・受入機関)

2019/06/01〜2019/06/08	マニラ・Load na Dito
2019/06/13〜2019/06/20	〃
2019/06/08〜2019/06/13	バコロド・Orange Project
2019/06/20〜2019/06/27	ホーチミン・Zero Station
2019/06/27〜2019/06/30	ハノイ・A space
2019/06/30〜2019/07/20	バンコク・Tentacles
2019/07/20〜2019/07/27	クアラルンプール・DAM Interactive
2019/08/03〜2019/08/12	ジャカルタ・GUDSKUL
2019/08/15〜2019/08/21	〃
2019/08/12〜2019/08/15	バンドン・Sunday Screen
2019/08/21〜2019/08/31	ジョグジャカルタ・Ruang MES56
※2019/10/27〜2019/11/02	〃

※フェロー期間終了後

プロジェクトの概要

ASEAN6 ヶ国、10 都市の受入機関の協力の下、ビデオのアーカイブ施設へのリサーチ、様々な映像作家や有識者へのインタビュー、ディスカッションなどの交流を通し、ASEAN 地域の各国の映像作家たちの実践を調査し、これまでのビデオ史を考察していきます。ビデオ・アートはカメラが現実を映すその特性から、時代とより色濃く密接に関わっているジャンルです。アーティストはビデオに何を見ようとし、何を託そうとしてきたのか？それはアジアのアートの文脈の中で、どんな意味を持っていたのか？そして、その延長上にある今を生きる現代のアーティストたちはどんな問題を抱え、今の時代にビデオを使って何を表現し、その先に何を見出そうとしているのか。対話の中で互いの違いを丁寧に見つめ、その上で私達の取り組むべき課題を共有し、その先にある展望を共に見出しながら、深い共通認識の上に成り立つ映像作家同士のネットワークの構築を図っていきます。このビデオ史への問いの対象は作品だけに留まらず、同時に一般の人達にとってもビデオというものが何であったのか、どのように作用していたのかを再考するために、ファウンドビデオの収集とそれらの考察を行っていきます。

写真 01
ハノイ、A space で行われていた Red Slumber の個展でのアーティストトーク

MANILA　2019/06/01〜2019/06/08・2019/06/13〜2019/06/20

最初にフィリピンのビデオ史を知る為に、アーカイブでいい場所がないかと関係者に聞くと、みんな口を揃えてそんな施設は無くて人がアーカイブなのだと言います。人と実際に会って話を聞くしかないと。それで最初に会ったのが Moving image を扱うコミュニティーベースのコレクティブ Lost Frames(写真 02)。メンバーはアーティストの Poklong Anading, Lena Cobangbang, Victor Balanon, Cocoy Lumbao, Rico Entico などのすでに十分なキャリアを積んでいるアーティストたちで、毎回違ったテーマを持ったスクリーニングなどのイベントを通し、そこで繰り広げられる様々な議論の場を作る事を目的としています。毎回白熱した議論が繰り広げられるそうで、後でスタジオ訪問させてもらった、Tanya Villanueva もこのスクリーニングに観客として参加したことがきっかけでビデオ・アートを作るようになったそうです。この後別日に、Cocoy Lumbao、Rico Entico にはインタビューをしながら個人の作品について詳しく話を聞きました。作品もそうですが、食堂併設のコミュニティーアートスペースとして最近 Rico が立ち上げた”GOTO LECHON KNOW”というスペースがとても興味深かったです。そこは元々薬物で有名なエリアだったらしく、Rico が薬物中毒でホームレスだった元シェフの男性と出会い、彼と話をしていくうちに立ち直るチャンスをあげたいと思い、彼をシェフに抜擢することにしたそうです。食べさせてもらった Goto（フィリピンのお粥）は一番美味しいものでした。他にも地元のストリートチルドレンたちに食事を提供したりもしているそうです。店内には既にいくつか作品が展示されていて、今後はスクリーニングイベントを行ったり、個展などを企画していく予定だそうです。アートがその世界のコミュニティーの中で閉じることなく、リアルな地域コミュニティーに開かれている場に置かれる事で機能する役割みたいなものに Rico はすごく意識的に活動をしている点に好感が持てました。

写真 02　Lost Frames のメンバー

マニラの受入機関の Load na Dito（写真 03）は、アーティストの Mark Salvatus とキュレーターの平野真弓が立ち上げたモバイルリサーチ、アーティスティックプロジェクトです。これまで地元密着型のアートプロジェクトや映像のスクリーニングなど様々な活動を行って来ました。よりフットワークを軽く活動するために特定の場所を持たずに活動しているそうです。バンクーバーで行ったフィリピンの作家の映像作品のスクリーニングが大変興味深かったのですが、どのように作家を選んでキュレーションしたのかと聞くと、連絡が取りやすかったり、近くにいる存在の中から選んでいると言います。敢えて、コンセプト重視の企画を打ち出すのではなく、オーガニックな関係性から生まれてくる独自の雰囲気のようなものを大切にしながら、その可能性を十分に引き出すスキルを持っているのが、彼らの魅力的な活動の鍵のように感じました。続いて Mark Salvatus と作品をプレゼンし合いました。彼の多くの映像作品はナレーションも字幕もなく、説明をできるだけ省き、見る人にその捉え方を委ねる作品が多い印象ですが、彼の作品は曖昧さを持ちながらも同時に骨太なコンセプトに裏打ちされた作品の強さみたいなものを感じる事ができます。中でも面白かったのが、父親の古いレコードのコレクションを発見したことをきっかけに作った”Notes from the New World”という 2 チャンネルの映像作品です。1901 年にアメリカとの戦争中に兵士らによって結成された吹奏楽団の演奏の存在に着目した、今のフィリピンが置かれる現状の様々な戦争の歴史の背景に対する実感を伴った個人的なアプローチにより、複雑な状況に対し、複雑さを受け入れたまま知る体験を与えてれくれます。Mark は言います。「今の世の中の様々な問題を考える時、それらの全ては小さな物語、ホームタウン、家の中といった小さな単位の事柄から始まっていて、それらはとてもドメスティックな事柄だったりするけれど、すべての小さな物や事柄の由来や意味を紐解くことで、大きな歴史の流れや様々なグローバルな問題との関係性を見出すことができるんだ。」と。彼が地元の様々な事柄のディテールを鋭く見つめる洞察力とそれをグローバルな視点で捉え直すことのできる柔軟で客観的な分析力、そしてそれを作品に昇華する事のできる作家力、どれも素晴らしいです。現実と物語との関係性に着目した僕の作品も見てもらい、そこで様々な話ができました。

写真 03　Load na Dito の ファウンダー Mark Salvatus と平野真弓

写真 04　アーティストの Yason Banal

皆が口を揃えて会った方がいいと言う Yason Banal(写真 04) は、前のフィリピンでのレジデンスの際も一緒に飲んだりした仲なのですが、改めてインタビューをしながら話を聞きました。彼のような映画もビデオ・アートも彫刻も、絵画も、様々なメディアを扱いながらインスタレーションとしてその境界線を横断して自由に制作するスタイルのアーティストにとって、その境界線はどんなものなのか大変興味があり質問してみました。彼は答えます。「それぞれの境界線は非常につまらないことでもあり、非常に重要なことでもある。例えば映画とビデオの事を考えるのであれば、それは空間、観客、そこでの機能を考えるのに非常に役に立つ。」と。彼は映画監督の作品をギャラリーで上映する機会を作ったり、逆に映画の世界にビデオ・アートを持ってきたりして積極的にその境界線を跨がせようと試みます。このことはオーストラリアでの ASIA PACIFIC TRIENNIAL でのキュレーションの仕事に繋がっていきました。そこではフィリピン人による過去最大級の 70 作品以上の映画、ドキュメンタリー、アニメ、ビデオ・アートを紹介したといいます。映画とビデオ・アートの境界線を見定めた上で、改めてその違いについて聞いてみると、それはやはり作品そのものではなく環境にその違いのウェイトがあると彼は言います。「お金を払って、一つの画面の作品の始まりから終わりまでを見るものである映画と、空間の中で誰かと話したり、たまに集中したり、途中で出て行ったりできるビデオ・アートはその見られるシチュエーションが違うし、そしてそのこともそれぞれのメディウムの重要な側面なんだ。同じ作品でも映画館で観れば映画になるし、美術館で見ればそれはアート作品になる。それは空間によるものでデュシャンの便器の作品と一緒だよ！」と説明します。他にも例えば Super8(8mm フィルム) も昔は新しいものだったけど今では懐かしさの象徴みたいになっている、時代とともに変わる認識、概念の変化についても言及しました。作品には見られる状況の様々な要素が影響していて、そしてアーティストはそれらを知った上でその基準となっているものを壊すべきで、ビデオ・アートはそれを行える十分な可能性をもっているんだと彼は言います。なんとも勇気が出てくるような言葉をもらいました。

BACOLOD 2019/06/08〜2019/06/13

上 写真 05　アーティスト Manny Montelibano
下 写真 06　マイクロシネマ SAFE HOUSE

映像を扱うアーティストの Manny Montelibano(写真 05) に会う為に Bacolod に向かいました。Manny はアーティスト活動の他、St. La Salle 大学に機関を置く Institute for Moving Images のディレクターをしています。そこでは主に映像製作のワークショップなどを行っており、一般の人や高校生なども参加できるそうで、中にはそのまま映画監督になったり、俳優になったりと多くの優秀な人材を輩出しているそうです。また彼は SAFE HOUSE(写真 06) というマイクロシネマ（小さな映画館）も運営していて、そこでは地元の映画作品を上映したりしているといいます。ハリウッド映画の影響が強い為なかなか普及しない国産の映画の普及のために、地元の人たちに上映無料で公開することもあるそうです。凄すぎます！他にも Orange Project というギャラリー（もはや美術館並みの広さ）の立ち上げのメンバーでもあり、そのディレクションに今も関わっています。さらにはマニラ以外の国内の作品を集めた映画祭を企画したりと、かなりアクティブに活動しているのですが、一番感銘を受けたのは、後日時間をもらって見せてもらった彼の作品です。特にベニスビエンナーレのフィリピン館で発表した、フィリピンの南シナ海の領有権を主張する中国との関係を巡る、ルソン島？北部で撮影された 3 チャンネルでのインスタレーション作品、”A Dashed State” がとても興味深かったです。始めこそ地元の漁師のインタビューでその被害が語られてはいますが、その後は海や海岸から見える風景、島の人達の暮らしが、そこで受信される中国語のラジオの音やフィールドレコーディングされた音、昔から語り継がれてきた世界の成り立ちに関する歌など、感度の良い音と映像によって丁寧に描写されていきます。そこで浮かび上がるのは、境界線などではなく、地理的にも近い中国との昔から元々あった繋がりやその関係性。この地がどちらかのものかと主張する以前にあった関わりを、優しくも鋭い眼差しで、目の前に見える美しい風景の中から紡ぎ出していきます。音の扱い方が秀逸で素晴らしく、自分の作品でももっと音に敏感にならなければといい影響をもらいました。

写真 07　Zero Station ディレクター Nguyen Nhu Huy

写真 08　Cine House でのワークショップ風景

写真 09　アーティスト UuDam Tran Nguyen

HO CHI MINH 2019/06/20〜2019/06/27

受入機関の Zero Station の創立者でディレクターの Nguyen Nhu Huy(写真 07) に、彼がやっている Zero Station について話を聞いてみました。彼が Zero Station を始めた時、今のたくさんのアートスペースがある状況とは違って、ホーチミンには全くアートスペースがなかったそうです。スペースも無ければ、観客もいない。それで近所の人を集めて、スクリーニングやトーク、レジデンスなど様々なプロジェクトを行っていったといいます。でも今は様々なアート関連の場所が他に出来てきて、Zero Station はその存在意義を再考する時期に来ているそうです。彼は今、最も重要なことがしっかり怠ける時間を持つことにあると考えています。どんなスペースも計画があって、展示やイベントなど何かを仕掛け続けることでその存在を維持しているけど、怠ける時間はそこに有意義なものとして設定しづらい。そこで今は人を集めて一緒に山間部に行って、一緒に泊まって、一緒にご飯を食べて、ただずっと話すだけのイベントを考えているそうです。そこにはシンポジウムなどの限られた時間では築き辛い、お互いのことを深く知るというシンプルな目的があります。アーティストも、アーティストとしてじゃなくて、一人の人間として話し合う機会を持ってもらいたいそうです。ベトナムのビデオを含むアートシーンに関しては、若い作家も海外で活躍する機会も増えて良いこともあるし、その側面に悪い点もあると言います。有名になることや名声を得る事が目的になってしまっては本末転倒です。アーティストでいることの意義やその態度について、今のベトナムの現状を彼は懐疑的に捉えています。他にもホーチミンでは Phan Gia Nhat Linh や Trinh Dinh Le Minh などの映画監督にインタビューを行いましたが、劇場で公開される映画の場合、度々話題にあがるが検閲の問題です。殆どが不条理に思えるような理由（その理由すらわからないことも）で、たくさんのシーンをカットせざるを得ないことがあるそうです。なので多くの映画監督はインターナショナルバージョンとベトナムバージョンの 2 種類を用意するといいます。Phan Gia Nhat Linh は他にも運営するスペース” Cine House “(写真 08) で学生や一般の人に向けた映画のワークショップも行っていて、そこでは国内外からの講師陣たちによる指導のもと、様々な映画を作る為のノウハウを身につけられるそうです。アーティストの UuDam Tran Nguyen（写真 09）にもスタジオ訪問してインタビューを行いました。彼はプロジェクトごとに様々なメディアを駆使し作品を制作します。すでに彼の作品をいくつか拝見した事がありましたが、中でも現在進行中のプロジェクト ” TIME BOOMERANG” は、国同士のテリトリーの問題について言及しながらも、同時に私達の個人間の小さな単位においても想像し得る、自分の身体を超えたものや場所に対する所有の意識についても考えさせられ、興味深いものでし￥彼の作品もまた、様々な作品の背景に切っても切れない歴史との関係を持っています。

写真 12　アーティスト Nguyen Trinh Thi

写真 11　アーティスト Tuan Mami

HANOI　2019/06/27〜2019/06/30

ハノイでは 4 日間と大変短い時間でしたが、本当にたくさんのアーティストや関係者たちと出会いました。受入機関の A space はアーティストの Tuan Mami が立ち上げた自宅の中にあるアートスペースです。特に若いアーティストにフォーカスしながら実験的な要素の強い展示をやっています。滞在中も DOCLAB のメンバーでもある Red Slumber が展示をやっていました。(写真 10) DOCLAB にファウンダーの Nguyen Trinh Thi にインタビューをしに行ったときにも聞いたのですが、ベトナムではその教育的な背景から、問題について話し合ったり批評する文化があまり育っていない為、アーティスト達が展示の際など作品の内容について批評される機会が持ちづらいそうです。ですが、A space のオープニングではたくさんの来場者が展示や会話を楽しみながらも後半には作品についてじっくり話し合う機会を設けたりと、かなりバランスのとれた雰囲気で若いアーティストが育つための配慮がよく感じられました。

後日 Tuan Mami(写真 11) にインタビューし、彼の作品や取り組んでいる課題、抱えている問題など様々な話を聞きました。彼は元々絵画を専攻していたのですが、限界を感じ始めたところに Nha San Studio に出入りするようになり、そこでの出会いからパフォーマンスやビデオの作品を作り始めるようになったそうです。オランダのライクスアカデミーなどでの経験を持つ彼にとって、論理的な構造を持つコンセプチュアル・アートには大きな影響を受けた要素の一つだけれども、最近は自分の国には西洋のアートとは全く違った表現の可能性、また問題があることに気づきその事に取り組んでいるといいます。地元のミステリアスな出来事や極めて抽象的な事柄など、そこに横たわる完結した物語を語るのではなく、作品に入り込む為の入り口のようなきっかけとして、それらの物語を巧みに作品に取り込んで行きます。彼の作品は様々な政治的な問題の背景を浮き彫りにするけれども、同時に問題を問題としてだけ捉えないような、作品の美しさが捉える善悪を超えた真理のようなものを見せる時があります。こういった事ができる作家はかなり貴重で、そこも彼作家としての強みだと感じました。ヘビーな現実を作品として扱う時の困難さについてもいろいろと意見を交わす事ができました。

DOCLAB のファウンダー Nguyen Trinh Thi(写真 12) にも DOCLAB で話を伺いました。DOCLAB を始めるに至った経緯や取り組みなども大変興味深い話でしたが、特にファウンドビデオを扱った Nguyen Trinh Thi 自身の作品について話を聞けたことは、ファウンドビデオを収集し、これからそれを使って作品を作ろうとしている私にとってとても重要で貴重な機会でした。他にも彼女の作品における物語、ナラティブの捉え方やその実践など、どれもが素晴らしいものばかりで、衝撃でした。彼女は普通のストーリーテリングの手法やリニアなナラティブに興味がなく、むしろそれを壊して行くことに実践の軸があります。リニアな物語はワンサイドの歴史を物語るけれど、本当の歴史は断片的なものであると彼女は言います。旅をしながら出会った様々な人達に、折った紙にそれぞれのストーリーを書き込んでもらって、それを広げた時に見えるリニアにない多層的な物語の形などを示したりと、従来の方法ではない実にユニークな方法の実践を行っています。かなり作品や話に刺激をもらいました。他にもアーティストの Nguyen Phuong Linh 、Nguyen Minh Phuoc にも多忙な中少しだけ時間を作ってもらって、作品を見せてもらったり、色んな話をインタビューで聞くことが出来ました。特に Nguyen Minh Phuoc の映像作品では国内の地方からの労働者が抱える問題などを扱っていて、それに寄り添う形で制作した方法が興味深かったです。

写真 10　ハノイ、A space で行われていた Red Slumber の個展のオープニングレセプション

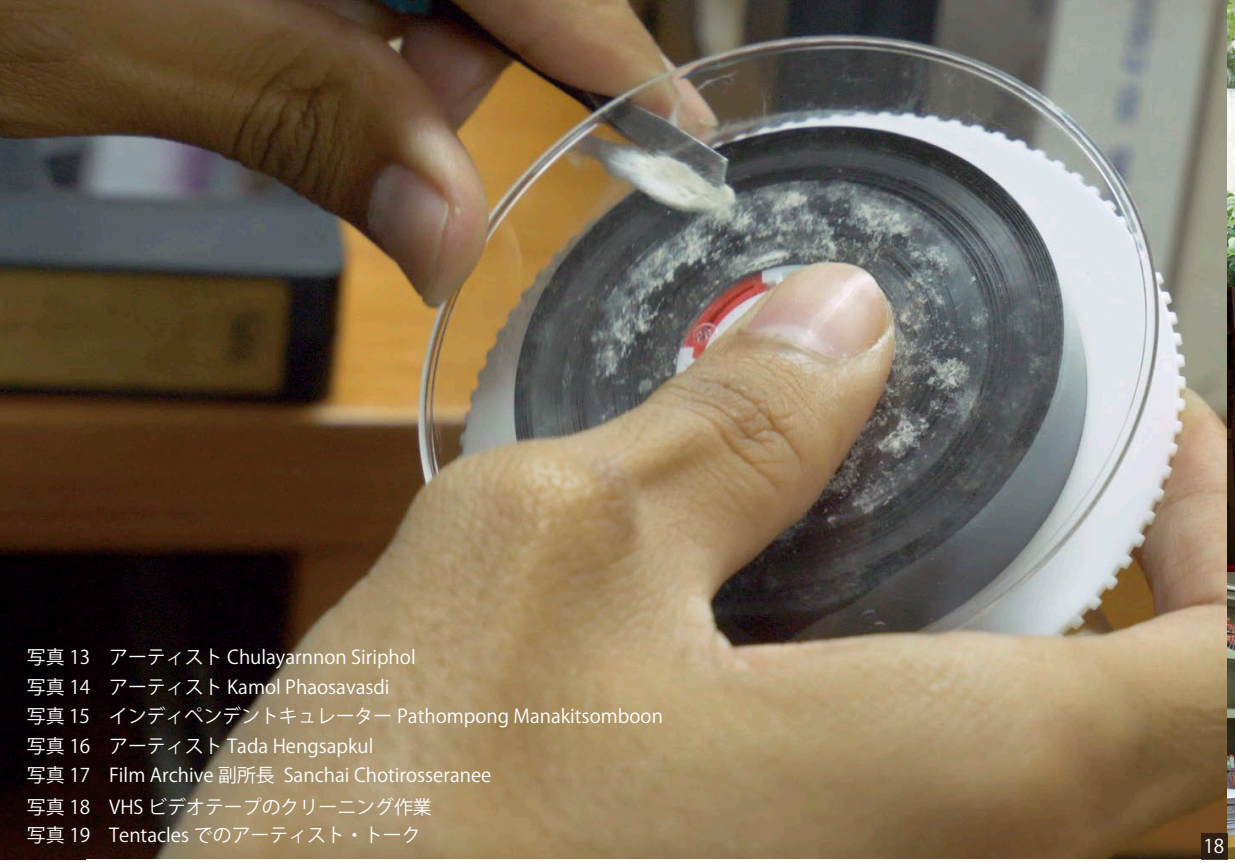


写真 13　アーティスト Chulayarnnon Siriphol
写真 14　アーティスト Kamol Phaosavasdi
写真 15　インディペンデントキュレーター Pathompong Manakitsomboon
写真 16　アーティスト Tada Hengsapkul
写真 17　Film Archive 副所長 Sanchai Chotirosseranee
写真 18　VHS ビデオテープのクリーニング作業
写真 19　Tentacles でのアーティスト・トーク

BANGKOK　2019/06/30～ 2019/07/20

バンコクでは作品展示の他、ワークショップ、レジデンス、スクリーニングイベントなどを行っているアーティストランのアートスペース Tentacles に滞在しました。スタッフも同じレジデンス先に住んでいるので、細かいサポートやアドバイスを受けながら、様々な場所に連れて行ってもらい、たくさんの時間を一緒に彼らと共に過ごすことが出来ました。Tentacles はギャラリーやスタジオが集まっている場所にある為、気軽に他の作家に会えたり展示を見る機会を得れました。他のレジデンス作家の Ge Yulu、Huang Ding Yun と共に、ギャラリー巡りをしたり、互いの国のことなど多くの事を話すことが出来たのはいい経験でした。ファウンドビデオの収集に多くの時間を裂きながらも、アーティストやキュレーターたちへのインタビューや Film Archive 施設の訪問、アーティスト・トーク、作品やファウンドビデオのスクリーニングなどを行いました。まず始めにインタビューをしたのが Chulayarnnon Siriphol (写真 13) です。彼は映画とビデオ・アートの両方の領域で仕事をしています。特に政治的、歴史的な問題とそこにおかれる身体との関係に興味を持っていて、ヘルメットを被った僧侶の作品を始めとするユニークな作品の中からは、社会的背景に対する鋭い考察過程を読み取ることが出来ます。Hi-8、MiniDV からフィルム、デジタルメディアと時代と共に変容するそれぞれのメディアを扱ってきた彼にとって、特にデジタルメディアの情報が触れなくなった点の決定的な違いについて話してくれました。デジタルメディアが時間や物理的なスペースを超えてどこにでもアクセスし、容易に繋がれる点、また SNS のような媒体を通して、水のように形を常に変容し続ける事にも意識的でなければならないとも言っていました。次にタイの現代美術の先駆者でもあり、アナログの時代からビデオ作品を作っている Kamol Phaosavasdi(写真 14) にもインタビューを行いました。長いキャリアの中でどのようにビデオメディアを扱ってきたか、アイデアをどのように展開していったのか、作品の時代背景との関係に関してもたくさんの興味深い話を聞くことが出来ました。チェンマイ在住のインディペンデントキュレーター、Pathompong Manakitsomboon (写真 15) へのインタビューでは、彼のタイの映像作家に向ける眼差しに加え、彼がキュレーションしているファウンドビデオについての意見を交わすことが出来ました。映画とビデオ・アートの違いについて、全く無いと断言したのは今回彼が初めてで、とても興味深い話を聞けました。他にも映画フルメタル・ジャケットのワンシーンを自ら演じる映像作品が魅力的なアーティストの Nuttapon Sawasdee、タイの映画に精通している Jit Phokaew にもインタビューを行い、タイ映画について色々と話を聞けました。魚の住処として海中に沈む戦車の映像に加え、ベトナム戦争時に南ベトナムとアメリカ側についていたタイ人の兵士が家族と交わしていた手紙などを含むインスタレーションを発表していた Tada Hengsapkul(写真 16) へのインタビューでは、個人的な歴史と国家としての歴史の関係、そこに伺える物語と歴史の関係性など様々な意見を交わしました。Film Archive への訪問では、副所長の Sanchai Chotirosseranee(写真 17) にインタビューを行いました。施設の取り組みを紹介してもらいながら、100,000 本以上のファミリービデオの収集とその意義について伺うと、その理由にファミリービデオは LOVE の一つの証だからと断言していたのが印象深かったです。他にも、日本に行ったタイ人が撮った 8mm フィルムを見せてもらったり、アナログビデオのデジタイズの際のクリーニング (写真 18) の過程を見学させてもらいました。バンコクの最終日には Tentacles でのアーティスト・トーク (写真 19) を行いました。自身の過去作品のスクリーニング、説明に加え、これまで収集したファウンドビデオの一部を上映し、それについての様々な意見を交わしました。

KUALA LUMPUR　2019/07/20〜2019/07/27

クアラルンプールでは DAM Interactive の 共同ディレクター、プロジェクトマネージャーの Suzy Sulaiman(写真 20) に様々なアーティスト、関係者を紹介してもらい、多くの人にインタビューを行えました。彼女が移民問題の課題に関する作品に取り掛かっているので、一緒にフィールドワークとして移民が多く住むエリアや様々な宗教の寺院などを見て回れたのはいい経験でした。はじめにアーティストの Okui Lala(写真 21) に話を聞くことが出来ました。写真を学んでいた彼女が動画を扱う様になった経緯を含め、インタビューや映像作品における、撮影者と被写体、演者の関係性への興味や視点はとても興味深いものでした。彼女の作品の興味の中心にある、マレーシアが抱える移民問題への課題や多民族国家におけるアイデンティティーと言語の関係、そこに折り重なる翻訳における様々なズレに対する意識は彼女自身のアイデンティティーにとって切実な問題でもあり、またそこには私達が他者と生きる上での様々なヒントがあるように感じました。ビデオ作品も作っているサウンドアーティストの Goh Lee Kwang とは、現実に於いて映像で記録する事と、音だけで記録することの様々な違いについて話しました。また、デジタル機材とアナログ機械に対する身体的な関わり方の決定的な違いについての話は興味深かったです。MARS(Malaysian Art Archive and Research Support) (写真 22) では、アーカイブを通してマレーシアのアートについて話を聞きました。ついでに同じ建物内にレジデンスに来ているアーティストたちのスタジオ訪問もできました。絵画制作をしながらも、近年映像作品を多く作っているアーティストの Gan Siong King (写真 23) のスタジオを訪問し、話を聞くことが出来ました。Arcus Project で日本の守谷に滞在制作した際にインスタグラム上で発表した映像のことやインスタグラムを媒体に使った経緯、その際に築き上げた被写体との関係とその意図などは特に興味深かったです。話はなぜアーティストをやっているのか、なぜやめられないのか、これは仕事なのか、一体この世の中にとってどのような事なのかなど色々と互いに正直に話せたのがよかったです。映像を含む様々なメディアを扱うアーティストの Chong Kim Chiew のスタジオ訪問では作品を見せてもらいながら、これまでの様々な作品のアイデアについて話を聞きました。中でもキュレーションした作品、架空の東南アジアの様々な国のアーティストとして参加させたグループ展（実際は Chong Kim Chiew が名前を変えて制作）のアイデアは面白かったです。Lostgens の Yeoh Lian Heng に、彼らがこれまでやってきた活動に加え、今行っているプロジェクトについての話を聞くことが出来ました。彼らは今、移民たちの子供たちが学校に行けない状況に対して学校のような場所と機会を作っていたり、Lostgens が位置するチャイナタウンの地域の人たちに 1969 年に起こったマレーシア史上最悪の民族衝突、5 月 13 日事件についての聴き取りをしながらデータベースを作ってコミュニティーミュージアムを作る試みを行っています。中でも聴き取りの手法や、それらの話の歴史的事実と個人的な思い込みとの関係性をどう捉え、どう扱うかについては私自身の作品の作品の興味でもあります。彼らはそれら関係性も含めて一つの重要な資料として扱っているようです。多くの作家がマレーシアの多民族国家である状況とそれぞれのアイデンティティーについて様々な試行錯誤を繰り返しているのが印象的でした。

写真 20　DAM Interactive 共同ディレクター
Suzy Sulaiman

写真 21　アーティスト Okui Lala

写真 23　アーティスト Gan Siong King

写真 22　MARS (Malaysian Art Archive and Research Support)

SINGAPORE　2019/07/27〜2019/08/03

シンガポールでは、2007 年よりプロジェクトベースの様々な活動を行ってきた Post-Museum の Jennifer Teo と Woon Tien Wei (写真 24) の幅広いネットワークによって、様々な人に会い話を聞くことが出来ました。彼らにはたくさんの展示に連れて行ってもらったり、ファウンドビデオに関する様々な情報や捜索場所を紹介してもらいました。滞在の後半ではアーティスト・トーク (写真 25) を行い、過去作品のスクリーニングと説明、今回のプロジェクトについてのプレゼンを行いました。アーティストの PG Lee に話を聞いた際には、主に撮影された映像が編集される前の、“生な” 状態である時の可能性や魅力について、また編集の際に無意識にも立ち上がってしまう物語の存在について意見を交換しました。パフォーマンスアーティストの Jeremy Hiah のスタジオ訪問では、これまでの作品の映像を見せてもらいながら、長いキャリアの中で彼がパフォーマンスをするに至った経緯から、彼のアーティストとしての哲学に至るまで様々な話を聞くことが出来ました。アーティストで長編映画の監督でもある Green Zeng に、彼がビデオ・アート作品を出品しているグループ展「Singapore Utopia」の会場 Chan+Hori Contemporary で話を聞くことが出来ました。彼がどのように映画とビデオ・アートその違いをどのように考えているか、物語をどのように扱っているのかに興味がありました。彼は映画とビデオ・アートを完全に違うものとして捉えていて、プロジェクトの内容によって制作するメディア選んでいるそうです。ストーリーテリングの手法は彼にとって一つの重要な表現手段として確立されているようでした。話の中でも特に人々の Truth Telling と歴史の関係に対する意欲的なアプローチはとても興味深いものでした。アーティストの Urich Lau(写真 26) へのインタビューでは、これまでの作品について一つずつ説明をしてもらいながら話を聞きました。中でもパフォーマーとのコラボレーションで、たくさんの CCTV カメラやドローン、携帯でのセルフィー映像などを自らが VJ としてライブで見せるパフォーマンスにはたくさんの可能性を感じました。話の中で、シンガポール人がアイデンティティーを持つことの困難さについての話が繋がっていったのが興味深かったです。シンガポールの映画の歴史に関するリサーチャーであり、映像作家でもある Toh Hun Ping(写真 27) にも話を聞くことが出来ました。彼は映像作品制作に於いて自分ではカメラを持たない事を決めていて、フィルムを削ったものやファウンドフッテージなどを使用して制作しています。また彼は個人的にもシンガポールに関する映画を集めていて、それを使って作品を作るプランについても教えてくれました。それらの主題は変化の激しいシンガポールの風景について、そこから読み取れる知らされていない歴史、そしてやはりシンガポール人のアイデンティティーを巡る試みにあり、家族についての問題にありました。明確なコンセプトの下に、映画を重要な記録、資料として捉えている点がとても魅力的です。自らの身体を使って映画、ビデオアート、パフォーマンスなどを行うビジュアルアーティストの Kray Chen(写真 28) の自宅兼スタジオでも話を聞くことが出来ました。彼の参加者のいないウェディングパーティーを扱った作品を例に取りながら、現実に介在する物語について話をしました。様々な物語は、私達の現実がどう在るのかを知るのに時に役に立ち、時にその現実の認識を歪ませる点についての話は興味深いものでした。彼は、隅々まで管理の行き届いたユートピアのようなシンガポールの街の中は空洞なんだと言います。長くはない歴史的な背景や他の国にとって重要に思えない政治に関して、シンガポール人が自らのアイデンティティーを歴史的な文脈から獲得することの困難さ、その空虚感についても話してくれました。Goodman Arts Centre にアトリエを構える若いアーティストたちのスタジオ訪問では、様々な制作の試行錯誤の現場を見ながら話を聞くことが出来ました。死者とその後（SNS のアカウントなども含めて）についてアーティストの Eugene Tan は、インターネット上での様々なアプローチを作品で模索していました。若い世代の持つ全く新しい感覚の生死観は大変興味深いものでした。受入先の Post-Museum の活動について事前に知ってはいたのですが、改めてインタビューという形で話を聞けた事でより深く彼らのことを知れたように思います。彼らはアートが世界を変えることができるという強い信条のもとに、より良い社会、世界を作る為にコミュニティーベースの様々な試み活動しています。それらは必ずしも皆にとって心地良いものであるとは限りません。問題解決の為の機会を提供し、自分自身で何かを変えたいという思いを共有する機会を Post-Museum は提供するのです。今は世界的な気候変動の問題に取り組んでます。彼らの長い活動における広い視野を持った、着実な小さな一歩の積み重ねは、とても頼もしいものに感じました。シンガポールでは最後にビジュアルアーティストの Joo Choon Lin のスタジオを訪問し、作品を見ながら話を聞きました。彼女の立体作品や制作したコスチュームを使ったパフォーマンスはかなりぶっ飛んでいて、他では見たことのない独自の世界観が魅力的です。彼女は作品の中で私達が世界を認識する際に介在するフィルターのようなものをビジュアル化していると言います。それらはやはり先入観や無意識にも引き寄せられる物語の存在と現実の関係にも言及していて、そのことについて深く話し合う事ができました。

写真 24　Post-Museum の Jennifer Teo と Woon Tien Wei

写真 25　アーティスト・トーク、スクリーニングイベント
@Yeo Workshop

左 写真 26　アーティスト Urich Lau
中央 写真 27　リサーチャー・アーティスト Toh Hun Ping
右 写真 28　アーティスト Kray Chen

JAKARTA　2019/08/03～ 2019/08/12・2019/08/15～2019/08/21

ジャカルタでは、2022 年に開催される Documenta15 のアーティスティック・ディレクターとして選出されたアートコレクティブ ruangrupa と教育をベースとしたコレクティブの Serrum、版画のコレクティブの Grafis Huru Hara が 2018 年に新たに始めたオルタナティブスペース GUDSKUL(写真 29) を受入機関として滞在し、日々様々な人たちと出会い、交流する事が出来ました。GUDSKUL は大きな敷地内にある教育施設を中心に、アーティストらのスタジオやギャラリー、ラジオステーション、レジデンス施設などが互いにオーガニックな繋がりを持ったエコシステムとして存在し、その考えは彼らのコレクティブとしての在り方の実践でもあります。滞在した期間は多様な専門分野のコースから成るクラスの受講生らの最終発表が迫っていることもあり、議論が盛んに至るところで行われていたり、皆遅くまで作業していて活気のある活動を目にすることが出来ました。プラスチックの環境問題に対する持続可能でユニークなリサイクルのシステムを模索中の Samuel Bagas が敷地内で営むコーヒーショップが、初めての訪問者たちにも開かれた、緩やかで自然なコミュニケーションの場と機会を提供してくれます。

ミュージシャンであり、またビデオ・アートやミュージックビデオを制作するなど様々なジャンルを横断しながら活動する Henry Foundation(写真 30) のスタジオで話を聞くことができました。彼は MTV で育った世代で、理に適ったストーリーじゃなくても、クレイジーなものでも何でも有りのミュージックビデオの可能性にずっと惹かれていたそうです。OK. Video(写真 31）などを主催する ruangrupa では、かつてビデオ・アートがインドネシアで盛んでなかった頃に海外のビデオ・アート作品を紹介したり、ビデオカメラや編集機材を貸出して、撮影や編集の基本的な映像制作のテクニックを教えていたそうで、そこで Henry も更に何でも有りのビデオ・アートに衝撃を受け、彼自身もビデオ・アートを制作するようになります。昔の VHS テープで収録できるカメラを撮影に使用したりする彼に、アナログとデジタルのビデオの違いについて聞くと、アナログビデオの素材に触れる面白さについて話してくれました。実際、再生中のテープに磁石を近づけて映像の乱れを意図的に作り出すエフェクトを作品の中で使用したりと、彼のメディアの特性を活かしたユニークな作品作りが魅力的に感じられました。

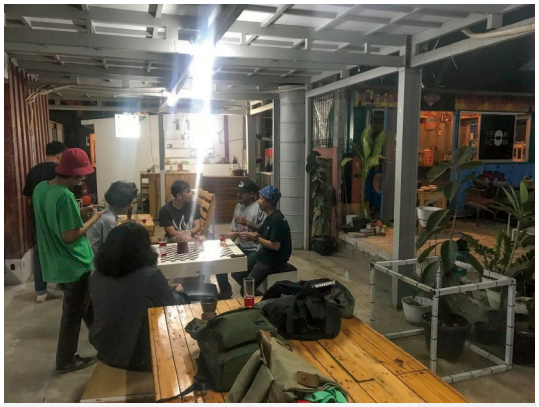
写真 30　アーティスト Henry Foundation

写真 33　映像作家、映画評論家の Afrian Purnama

写真 34　アーティスト Anggun Priambodo

様々なプロジェクトを行なっているコレクティブ、Forum Lenteng が企画するドキュメンリーと実験映画の映像祭、ARKIPEL のオープニングイベント (写真 32) にも参加しました。企画の中では過去のフィルムで撮影されたニュース映像の上映などが行われており、その中の一つの企画を任されていた Forum Lenteng のメンバーで、映像作家、映画評論家の Afrian Purnama(写真 33) に会い、後日インタビューさせてもらいました。彼はインドネシアのホームムービーをテーマとしたドキュメンタリー映画、" GOLDEN MEMORIES" の共同監督で、私がファウンドビデオを扱った制作を行っている点に於いても共通点も多いことから、様々な興味深い話を聞くことができました。映画とビデオ・アートの違いに関する話題では、そもそも家のテレビなどで見ていた映画作品は果たして映画と呼べるもの、体験だったのか？など、批評家ならではの映像メディアに対する鋭い考察が興味深かったです。長編映画の脚本を製作中のアーティストの Anggun Priambodo(写真 34) にも映像作品を見せてもらいながらインタビューする機会を得ることができました。映画のみならず、ミュージックビデオやドキュメンタリー、ビデオ・アート作品など同じ映像メディアでも幅広いジャンルの制作を行う彼にとってのそれぞれメディアの違いや、ストーリーテリングの手法についての話は、とても興味深かったです。演出に於いて、ただ脚本をなぞるのではなく、脚本を演者が演じている時間に起こっている様々な事柄に着目し、それに積極的に反応していくこと。つまりは物語が語られる現実を捉えようとするドキュメンタリーの要素を加えることで、物語の場をより自然で、豊かな複雑さを受け入れた状態のものとして描こうとする、彼のフィクションに対する姿勢や態度はとても魅力的に感じられました。

ruangrupa には毎日様々なアーティストや関係者らが訪れます。話をしていく中で、お互いの作品を見せ合って感想を言い合うシチュエーションが自然にできる雰囲気がなんとも心地良かったです。コメディーからドキュメンタリーまで様々な映像作品を手掛ける Panji Purnama Putra や、モスクの中、モヒカンでアザーンを歌う映像作品 "Bilal" が有名なアーティスト、Bagasworo Aryaningtyas にも作品を見せてもらいながらカジュアルにインタビューすることができました。



上 写真 29　GUDSKUL の共有スペースに集まって話すアーティスト達

下 写真 31　これまでの OK. Video のカタログ、DVD の一部

写真 32　ARKIPEL のオープニングイベント

BANDUNG　2019/08/12〜2019/08/15

バンドンに活動拠点を構える映像制作を活動の中心としたコレクティブ、Sunday Screen は 2008 年にジャーナリズムを勉強していた Yopie Nugraha や Rangga Aditiawan ら (写真 35) によってバンドンで結成されました。2009 年から様々な村で映像祭、Village Film Festival を開催し、村の人達が作った作品が放送される TV 局を作ったりと、ビデオを通じたコミュニケーションが生む化学反応を上手に利用しながら、インドネシアの地方の貧困などの様々な問題と向かい合います。学校に行けない子供達や希望を持てないでいる若者達に、ジャカルタのような大都市に依存することのない夢を思い描ける状況を模索する一方で、バンドンの街の歴史を語る上で外せない存在である地元を仕切るマフィアを取材した作品を作ったりと、かなり幅の広い活動を行っています。彼らは制作で関わる人達をただの取材対象として捉えるのではなく、互いに学び合い、コラボレーションを行う為の対等な関係を築く事に尽力します。そうすることで、映像作品やそこで開催されるフェスティバルの場は、決して Sunday Screen たちだけのものではなく、彼らがプロジェクトで関わるすべての人たち自身のものとして捉えてもらう事が出来るようになるのです。作品の撮影に関しても彼ら自身だけがカメラを持つのでなく、村の人にカメラを渡してインタビューし合ってもらうことで村の人同士の関係性を映し出す工夫をしたりと、カメラが持つ力関係の構造に敏感に反応し、巧みにずらしながらカメラを介した心地良い関係性を築き上げます。作品やフェスティバルのドキュメンタリーを見せてもらいましたが、どれも村の人達の表情が魅力的なのが印象的でした。後日、Rangga の協力で彼らが取材しているバンドンのマフィアのキーパーソンの方に僕も話を聞く事が出来ましたが、通訳してくれた Rangga のコミュニケーションのとり方の自然さと誠実さに、何か妙に納得させられてしまうものがあり、カメラを介したコミュニケーションにおける信頼関係がもたらす効果やその意味について考えさせられました。

同じくバンドン在住のアーティストの本間メイさんと Syaiful Garibaldi の自宅兼スタジオにて彼らと共に、映像を扱うアーティスト Muhammad Akbar、YouTube で絶大な人気を誇る Fluxcup こと Yusuf Ismail と一緒に話を聞く機会が得れました。(写真 36) コマーシャルギャラリーも多いバンドンのアートシーンについて彼らに聞くと、2008 年から始まったアートマーケットブームをきっかけにアーティストたちが売れる作品を作る傾向が強まり、その後の若いアーティスト達の中からアートシーンにとって重要な作家がバンドンから生まれていない問題について話してくれました。ビデオを扱うアーティストの数も彼らの世代に比べるとかなり少ないそうです。それぞれの作品を見せてもらいながら話した、映画とビデオ・アートの違い、現実と物語に関する話はとても興味深いものでした。中でも、インドネシアと日本の関係についてなど、史実に基づくリサーチベースの作品を作る本間さんにとって、その重要な要素となり得るインタビューに於ける真実と個人的な思い出の関係についての話は特に興味深かったです。

上 写真 35　Sunday Screen の Yopie Nugraha、Rangga Aditiawan
下 写真 36　（右から）Yusuf Ismail、Syaiful Garibaldi、本間メイ、Muhammad Akbar、柴田祐輔

YOGYAKARTA　2019/08/21〜2019/08/31

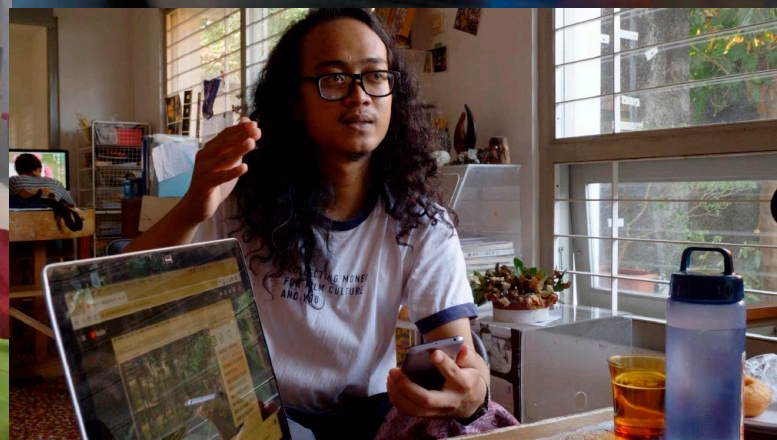
ジョグジャカルタでは、受入機関のアーティストコレクティブ Ruang MES56 が改修中ということで、MES56 のメンバーの Angki Purbandono のスタジオに滞在させてもらいました。パブリックスペースではないのですが、ここにも日々 MES56 のメンバーやアーティスト達が訪れるので、自然にたくさんの人達と知り合うことができました。Angki Purbandono に作品を見せてもらいながら話を聞いたのですが、彼は日本の Mizuma Art Gallery の所属のすでに有名な作家で、彼のスキャナーを使ったシリーズの作品を知っていたのですが、ストリートスナップや刑務所に入っていた時の事を作品にした、”Prison Art Programs“などの作品は初めて知りました。刑務所に入っても、ただでは転ばないアーティストとしての精神など、彼と話していて学ぶことがたくさんありました。

MES56 のファウンダーの一人でもあり、写真や映像作品をメインに制作しているアーティストの Wimo Ambala Bayang(写真 37) に、作品を見せてもらいながらインタビューさせてもらいました。彼の作品の多くは日常生活の中に隠されて見えづらくなっている歴史や真実をユニークに可視化させ、日常に新たなパースペクティブをもたらしてくれます。中でも特に興味深かったのが、Wimo が市場でよく見かけていたストリートチルドレンの頭に CCTV を装着してもらい、更に彼にカメラを手に持って市場内を撮影してもらった素材を使って制作したドキュメンタリー作品です。少年が市場内の人たちにインタビューして、市場の人達を紹介していくのですが、少年が撮影した映像には彼が語りたかった物語の輪郭がぼんやりと浮かび上がります。同時に Wimo らも少年の事について市場の人達についてインタビューしたりと、主観と客観の視点が入り混じっていく中で、外部の人間だけでは捉えられないような、少年を主人公とした市場の有機的な関係性やその営みが生き生きと描かれていました。YouTube などもなかった 2004 年に、Wimo と彼の映画のプロデューサーと、同じ Mes56 のファウンダーでもある Woto Wibowo は、ビデオ作品を観る事のできるプラットフォームを作るために、ビデオ作品のコンピレーション DVD、VIDEO BATTLE(写真 38) を始めます。これまで発表した全ての作品を見せてもらいましたが、ユニークなものが多くて、親しみやすい作品が多いように感じました。今は同じ Mes56 のメンバーで、若い映像作家の Arief Budiman がそのディレクションが行っています。

上 写真 37　アーティスト Wimo Ambala Bayang
下 写真 38　VIDEO BATTLE の DVD の一部

自身のアーティスト活動を行いながら、音楽レーベルを立ち上げたり、2015 年にはジョグジャビエンナーレのキュレーターも務めた Wok the Rock こと、Woto Wibowo(写真 39) にも彼の多様な活動について作品を見せてもらいながら話を聞くことができました。彼は 2012 年に横浜の黄金町バザールに滞在した経験が有ります。アートがどのように人を繋げる可能性を持っているのかを追求しながら、インドネシアのコレクティビズムを体現するような活動を行ってきた彼には、黄金町バザールのアート関係以外の人達や地域との繋がりやその機能の可能性を開く事が重要な課題だと感じられたそうです。そこでまず彼は、誰でも使えるフリースペースを黄金町に用意しました。キッチンでは誰もが料理できる環境を整え、図書スペースには漫画や様々な国の言葉の辞書を備えました。TV ゲームなども置いて、アート関係者以外でも毎日たくさんの様々な人達が集まり自由にコミュニケーションがとれる空間を作り上げました。まさにこれまでインドネシアの様々なコレクティブで私が感じてきた、シンプルではあるけれど集まって話す機会を持つことの重要性や可能性を自然な感じで提案してくれています。彼が始めた音楽のレーベル、Yes No Wave Music に関しても、すべての音源が無料でダウンロード可能でどんな用途にも使用が認められています。彼のこれまでの実践のすべてに、何か一人勝ちしようとない、シェアの精神が感じられてとても魅力的に感じました。後日 Yes No Wave Music のレジデンスで、カイロとベルリンから来ていた音楽家たちのトークが LIFEPATCH で行われていたので、こちらにも参加してきました。そこでも、滞在のプレゼンテーションに加えて、コレクティブがどのようにして可能かという話題が上がっていました。

ちょうどジャカルタでは、国際的な現代美術祭 ARTJOG が行われていたので見に行ってきました。若い作家のコンペティションも設けられていて、今のインドネシアの現代美術の傾向のようなものが捉えられ大変興味深かったです。参加作家で、インターネット上の画像をコラージュして写真作品を作るアーティストの Agan Harahap とも作品を見せ合いながら話す機会が持てました。デジタルコラージュで様々なセレブや著名人たちをイスラム教徒達の格好にするシリーズはユニークな視点でありながらも、宗教や政治、現実と非現実などの様々な境界線を浮かび上がらせて、それらを自由に越境してみせます。彼の作品はどの作品もクオリティーが高かったです。アーティストの横内賢太郎さんが始めたレジデンスなどを行っているプロジェクト、ASP : Artist Supprot Project にもお邪魔して、これまでの活動についての話をお聞きする事ができました。ちょうどペインターの山上渡さんと江口綾音さんがいらっしゃっていて、日本人から見えるジャカルタのアート事情についても、様々な話をすることが出来ました。ARKIPEL にも作品を出していた Mes56 のメンバー、Arief Budiman（写真 40）にもこれまでの作品を見せてもらいながら話を聞きました。彼は完全に次世代の映像作家といった印象で、現在進行系の様々な事象をインターネットでのリサーチで捉えながら作品を作っていきます。操作中の PC のモニター画面や SNS などをキャプチャーしたものをスクリーンショットで見せたり、Google マップの事件現場の映像とクロマキー合成で事件を再現したものを合わせた作品など、どれもアイデアが今のリアルな感覚と共にあり、そのセンスの秀逸さに魅了されました。リサーチャーなどから成るコレクティブ、KUNCI Cultural Studies Center（今は KUNCI Study Forum & Collective に名前を変更）の 20 周年のイベント (写真 41) にも参加しました。後日 KUNCI のメンバーでもある、リサーチャーの Fiky Daulay には、今年の ARKIPEL で Peransi Award を受賞した Cahyo Wulan Prayogo と一緒に、彼らがコレクティブ Belangtelon Initiative として行っているプロジェクトや映像に制作にまつわる様々な問題意識について話を聞くことができました。他にも、アートのアーカイブ施設 IVAA : Indonesian Visual Art Archive（写真 42）に行ってビデオに関する書籍を閲覧させてもらったり、ギャラリー巡りなどをしながら、充実したリサーチを行う事ができました。



右上 写真 39　アーティスト Woto Wibowo
右下 写真 40　アーティスト Arief Budiman
左 写真 42　アートのアーカイブ施設 IVAA : Indonesian Visual Art Archive

写真 41　KUNCI Cultural Studies Center の 20 周年イベントにて

インドネシアのコレクティブのこと

私自身が東京のアートのフィールドで活動するコレクティブ、Ongoing Collective にいる事もあり、活発的な活動を見せるインドネシアの様々なコレクティブがどのような問題意識を持って、どのように繋がり、活動の実践をどのような形でシェアしているのかに大変興味がありました。今回、ジャカルタのコレクティブ GUDSKUL や、ジョグジャカルタのコレクティブ KUNCI に滞在したのですが、そこでは毎日誰かがやって来て打ち合わせをしていたり、黙々と自分の仕事をしながら合間の談笑を楽しんでいたり、自然と夜には誰かがお酒を飲み始めて酒盛りが始まるといった緩やかな雰囲気で、僕のような一時的にやって来るよそ者にも開かれた居心地の良さを感じることが出来ました。もちろん彼らのホスピタリティの高さが前提にはあるのですが、それだけではなく、どこか助け合い一緒に時間を共有することが当たり前で、それを楽しんでいる様子が伺えます。一人でできる事でもできるだけ一人で完結させずに他の人と共にやる。それぞれの問題意識に基づいて、日々集い、話し合い、様々な考えやアイデアを分かち合い、それらの実現の為に協力し合い共に進んで行こうとする姿勢は、自然で無理がなく、とても魅力的に感じられました。特にインドネシアでは沢山のコレクティブが存在します。それぞれのメンバーがいろんなコレクティブに属していたりと、コレクティブ同士で緩やかなネットワークのようなものが見受けられます。MES56 の Wok はコレクティブは単独では成立し得ないのだと言います。彼らは様々な目的を持った他のコレクティブと関係性を持つことで、孤立して閉じてしまわずに、共に発展していくことで広がる可能性にコレクティブの存在意義を見ているようです。日本の私達の場合は個人主義的な考え方や、盲目的に競争社会をどう生き抜くかという思考回路に陥りがちです。どうすれば彼らのような自然に協力し合うオーガニックな関係性を築けるのでしょうか。

一方で、インドネシアのコレクティブの歴史やその現状、問題点について、アーティストの Irwan Ahmett と Tita Salina に批評的な視点から話を聞くことが出来たのは大変有意義な経験でした。1998 年のスハルト体制崩壊後、民主化へ向けて多くのコレクティブが誕生し容易に手を取り合っていた時代に比べると、現在のコレクティブは共通の目的、共通の敵を失っている状態にあり、結果、結束と調和のみを重視するがあまり批評的な姿勢がみられなくなり、コレクティビズムの渦の中で自分自身を失ってしまっている状態にあると彼らは捉えています。Irwan は現在のコレクティブが政府からサポートを受けることの問題点についても、ジャカルタの国際空港でのコミッションワークを例に、コレクティブやアーティストたちが美しいだけの社会に対する批評的な視点を持たない政府のプロパガンダのツールになってしまっていると痛烈に批判します。また、古くからあるコレクティブの権威が大きくなり過ぎた為、若いアーティスト達がそれらのコレクティブと関係を持たなければキャリアを築き上げ辛い状況や、クオリティーに関係なく近くにいるからという理由で展示の機会が与えられる状況に対しても批判しています。海外からの助成金の給付先のほとんどが古くからのコレクティブなどで、新しいコレクティブは資金面でも運営が難しい状況にあるそうです。そんなインドネシアのコレクティブを巡る現状の中で、彼らはインドネシアで古くからある相互扶助 (ゴトン・ロヨン) の今の時代に於ける意味について考えるようになっていったそうです。

最近では、安かったジョグジャカルタの地価も少しずつ上がってきていると聞きました。地価が東京のように高騰し、スペースを維持する事が難しくなり、毎日のように容易に集る事が困難になってきた時、彼らはこれまでの関係性をどのようにして維持していくのでしょうか。他の国の大都市と同じように散り散りになり、個人主義的なものの考え方になっていくのでしょうか。Wok は「遅いこと、何もしないことの重要性を知り、お金持ちでいることは危ない事だと気づくべきだ。」と言います。不条理な貧富の差を生む、現実としてある資本主義の矛盾や歪みに対しての彼らのコレクティブの実践が、今後どのように世界に新たな可能性を見せることができるのかとても気になりますし、どこかその可能性を信じてみたい気持ちにさせられます。

映像作家たちへのインタビューを通じて

今回のプロジェクトを企画した背景には、2018 年の 6 月に香港でのレジデンスの際に偶然見つけた、いつ、誰が、誰を撮影したか分からない 8 ミリビデオテープとの出会いがありました。適切な湿度、温度で管理されたビデオテープでさえその寿命は 30 年と言われており、1985 年に民生機の 8 ミリビデオカメラが発売されてから 33 年が経っています。既に再生機の生産やメンテナンスなどは終了しており、状態の良いものを探すのが困難な状況にある今、早急に行わなければ重要な映像が陽の目を見ずに時代に埋もれてしまう可能性を孕んだビデオテープというメディアへのリサーチに、これからのビデオアート・映像芸術の未来を見据える為の必然性を強く感じたことがこのプロジェクトの企画への経緯にありました。これまでのアジアのビデオ・アートは何を映してきたのか。アナログのビデオテープがデジタルメディアに変わるということは一体どんなことだったのか。訪問したすべての国のアーカイブなどにうまくアクセスできなかった為、リニアなアジアのビデオ史を俯瞰した視点で見つめることが十分に出来なかったものの、今回アナログの時代からビデオ作品を制作していた何人かの作家とこの変容の意味について、多様な見解や体験談を聞き意見を交換することが出来たことは、その変容を理解してく為の大きな手掛かりとなりました。

また、今回様々な国の映像作家、映画監督、また関係者らへのインタビューを通して、彼らの作品での取り組みについて時間をかけて深く理解し、話をすることができました。それぞれの違った切実な問題意識と作品に昇華する為の独自のアイデアや技法を持っており、見せてもらった作品はどれも悔しくなるほど魅力的でした。コロニアリズムの今に続く自国、自分のアイデンティティーへの強い影響に対して、それらをどう乗り越えていけるのかという共通する問いが、少なくない作品の根幹にあったように見受けられました。被害者として加害者を追及する為のものばかりではなく、人間そのものの弱さや資本主義が作り出す弱者、強者の関係やその構造などに対して敏感に呼応した作品が多かったように感じます。同時に日本人として、私はこのコロニアリズムについてどのような作品を見せることが出来るかについても考えさせられる機会となりました。。今回、作品で移民労働者問題を扱う何人かの作家の話を聞くことが出来たのですが、私もかつてインドネシア人の漁業研修生たちを取材し、サウンドインスタレーションを制作したことがありました。ただ、彼らからすると外部の人間として制作した私と違って、ハノイのアーティスト Tuan Mami の場合は実際に韓国で移民労働者として働き、その経験とそこでの取材を下に作品を作っています。この当事者の側に立つこと、立てることが持つ意味は、あまりに大きな違いのように感じられました。

インタビューの中で必ず質問したのは、物語と現実の関係性に対する認識と、それをどう作品の実践の中で反映させているかです。否応なしに現実が映り込むビデオというメディアにおいて、物語の要素をどう捉えてくのかはそれぞれの作家にとっての映像に対するスタンスを色濃く反映する為、毎回、それぞれに違う考え方や様々な実践やアイデアを聞くことが出来ました。バラエティー豊かでユニークな現実と物語との向かい合い方は、それぞれの作家の独自性として多くの作品に強度を与えているようにも感じました。また私自身が映画に携わった経緯からずっと考え続けている、映画とビデオ・アートの違いについての見解についての対話も、それぞれの作家としての立ち位置を強く感じさせるものでどれも興味深かったです。

ASEAN 地域の若いビデオのアーティスト達の数は予想したよりもそれほど多くはないようでした。今はマーケットと関係を持てる多くの作家は、ペインティングなどの売れやすい作品を制作する傾向にあるのだと聞きます。しかし、だからこそいま映像作品を作っている作家には強い意思と必然性を持って制作している人が多く、作品はレベルの高いものが多いように感じました。技術の面に関しても DIY でやるのだけではなく、プロのカメラマンや音声技師、カラリスト達と共に制作し、シネマレベルでのリッチな画作りと質の高いサウンドに裏打ちされた、強度のある作品も多くみられます。逆に今の時代の現実感に呼応した、映像のセオリー無視の自由な発想で作られる若い世代の作品にもいくつか出会うことができ、それらをビデオ・アートとは呼ばなくなった、Moving Image の新しい表現の可能性の片鱗をみつめることが出来たように感じます。

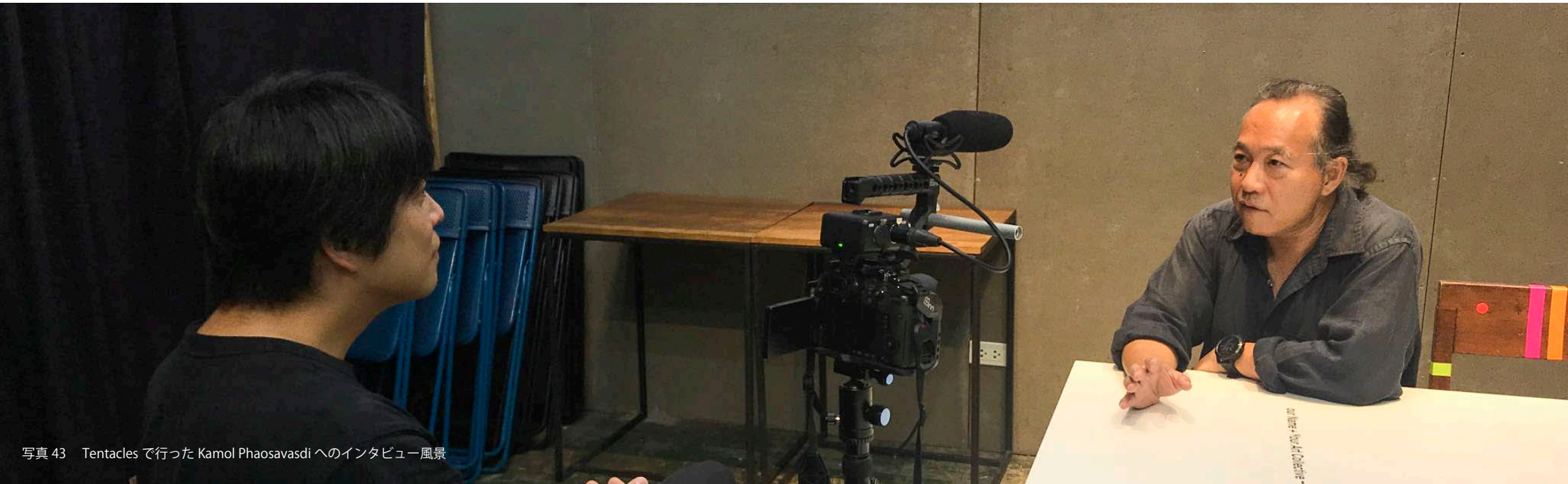


写真 43　Tentacles で行った Kamol Phaosavasdi へのインタビュー風景

写真 44　ISI での作品上映後のトーク

映像作家同士のネットワークの構築

今回の活動がとてつもなく楽しかった理由は、映像作家同士での対話の中で導き出される深いレベルでの問いや気付きを共有し、共感しあえる瞬間が多くあったからです。インタビューという対話の方法を多くの場合で選択したのも、関係性に程よい緊張感を与え、互いに向かい合う真剣さにうまく作用して良かったように思います。ここでの対話の深度の深さが、確かな信頼関係の構築に役立ってくれていると思います。その上で、とにかくいっぱい一緒に沢山話をして、一緒に食べて飲んで、くだらない話をダラダラとできる時間を多くの人達と共有出来たことは本当に幸せな時間でした。なんで、こんな私の為にこんなにも時間を割いてくれるのか、お世話になった皆さんには感謝の言葉しか有りません。今回培った関係性、ネットワークは、今後もしっかりと無理なく自然体で育んでいき、彼らを日本に招いた映像祭など、様々な企画へと繋げて行けたらと考えています。既に、フェローシップ終了後の 2019 年 10 月 31 日にも、MES56 のファウンダーの一人、アーティスト Wimo Ambala Bayang に声をかけてもらい、MES56 がジョグジャカルタの芸術大学、ISI (Indonesian Institute of the Arts,Yogyakarta) で開催するコレクティブの大規模個展、”We Go Where We Now” の関連イベントとして、私の映像作品の上映特集を VIDEO BATTLE の企画で組んでもらい、再びジョグジャカルタを訪れる機会がありました。全部で 12 作品ほど見せたのですが、作品についての様々な感想や反応を貰え、自分の作品を改めて見つめ直すいい機会となりました。（写真 44、45）

写真 45　上映イベントのフライヤー

ファウンドビデオのこと

今回の ASEAN 地域のビデオを巡る考察の中で、そのリサーチ対象としてファウンドビデオ（8 ミリ Video、Mini-DV、VHS－C 等の撮影時期、撮影者、被写体が不明なビデオテープ）を取り上げ、各地で収集にあたりました。その意図は、ホームビデオに見られるようなプライベートな日常の出来事とその記録行為の狭間に作用する物語の関わり方を見つめ、私達が無自覚にも引き寄せられる物語の引力について読み解いていくことにあります。家族や友人との良き思い出が記録されたホームビデオは、日常の日々を過ごす中で誰かが特に残しておきたい、記憶に留めておきたい、自分の人生はこうだったと物語りたい誰かの人生のハイヒストリーの一部とも言えるかもしれません。取り留めもない日々の中に発動するビデオ撮影というプライベートな記録行為とそのアーカイブを見直す行為は、個人や家族の生きる日々の現実を思い出という物語の形で整理し、人生を物語化する行為とも言えるでしょう。そこには幸せな人生といった、人々が無意識にも影響下にある理想の物語の朧げな輪郭が浮かび上がるかもしれません。歴史的事象に対する様々な立場や考えに基づく認識の違いとそこに描かれる物語の違いが歴史のバリエーションを生み出すように、どうやら物語は現実の見え方を都合の良いように変えてくれる力を持つようです。しかし、本来の未整理にある、ありのままの現実は語られる主体に依存することはなく、また語られる主体によってその姿を変容させることはなく、虚実を共に携えたままの混沌としてただただ私たちの目の前に存在しているのです。私の興味の中心はこの現実が内包する虚実の揺れ、またありのままの現実と私たちの知っているはずの思い込みの現実との距離、ズレ、にあります。撮影者の家族や友人らを撮ったホームビデオは彼らの現実を切り取ったドキュメンタリーであるにも関わらず、そこには既に思い出作りといった物語の気配が漂っています。撮影者や被写体が不明なファウンドビデオはその匿名性から、その物語が深く関わる人間の営みへの関係のどこか普遍的な何かについて触れていると考えているのです。

また、それぞれの国でのファンドビデオの収集は、私を思いもよらないような場所へと導いてくれました。古いもの、要らなくなったものがどう扱われているのか、その売られる場を観察していく中で、 普段の生活では見えづらづらい消費社会の構造についても思考を巡らす事ができました。今後、今回収集した 370 本のビデオテープを使ったプロジェクトを行う予定でいます。

写真 46　ジャカルタのリサイクルショップ (ファウンドビデオ購入場所)

写真 47　今回入手した 計 370 本のファウンドビデオ (VHS-C、8mm ビデオ、MiniDV)